

第2フェーズ 報告書

2012年4月1日～2013年3月31日

Heart on Coin “絆” プロジェクト

内容

はじめに 第2フェーズ発足の経緯と想い	3
Heart on Coin“絆”プロジェクトの発足	3
第1フェーズのまとめ	3
第1フェーズの歩みをもとに第2フェーズへ	4
第1章 プロジェクトの歩み	5
第1節 活動スケジュール	5
第2節 第1ターム	7
第3節 第2ターム	10
第4節 第3ターム	13
第5節 第4ターム	17
第2章 多文化関係学会への参加	19
第1節 概要	19
第2節 セッション内容	20
第3章 義援金報告	25
第1節 義援金総額	25
第2節 義援金届け先一覧	26
第3節 学校への継続的支援	28
第4節 受賞経歴一覧	31
おわりに	32
関係者一覧	32
プロジェクトメンバー一覧	32
関係者コメント	33
謝辞	34
参考資料	35

はじめに 第2フェーズ発足の経緯と想い

Heart on Coin “絆” プロジェクトの発足

2011年3月11日、東北地方太平洋沖地震が発生しました。あまりにも多くを失い、厳しい寒さの中ただ耐えて命をつないでいる方々を目の当たりにして、黙って通り過ぎることができないという思いを持った学生が集い、3月16日「Heart on Coin “絆” プロジェクト」を立ち上げました。

関西学院大学がある西宮、神戸三田の地域は1995年1月17日に阪神淡路大震災に見舞われました。当時、国内外を問わず寄せられた多くの支援のおかげで現在のような街にまで復興することができました。今度は私たちがかつてない大震災に直面している方々の支えになる番だと考えています。

実際に、私たちは家も家族も仕事も失われた人々に何ができるのでしょうか。このような事態では一体何が必要なのでしょうか。メッセージだけではお腹いっぱいになれません。そして私たちの支援できる額のお金だけでは失ったもののすべての埋め合わせは到底できません。私たちが支援できるお金は現地の失ったものの大きさや苦しみに比べると本当にわずかなものです。しかしこの2つを掛け合わせ、お金に気持ちを添えることによって、金額を超えた想いが伝わるのではないかと。困難に立ち向かっている被災地の人々と遠隔地からではあるものとともに立ち向かい、彼らの“心”を奮い立たせることが出来るのではないかと。そのような想いから、私たちは「Heart on Coin “絆” プロジェクト」というお金とメッセージを一緒に届けるプロジェクトを考えました。

第1フェーズのまとめ

第1フェーズ（2011年3月16日～2012年3月31日）では、「“心”と“心”を繋ぐ顔の見えるお金の支援」を掲げて活動してきました。誰がどのような経緯や想いをもってそのお金を募金したのか。そのお金はどこでどのように使われたのか。このプロセスを被災地の方々と支援者の方々にお伝えすることで、顔の見える支援を実現しようと考えました。被災者の方々には、支援者の方々の想いが伝わることで気持ちを奮い立たせて頂きたい。支援者の方々には、支援の届け先や被災者の方々の様子が分かることで、忘れないで頂きたい。こういった想いで活動を続け、第一フェーズでは世界41カ国から約460万円と500通余りのメッセージを被災地の15の小中学校に届けました。

また私たちは、「支援の継続性」を重視し、被災者と支援者の間に深い絆を築くことで、長期的な支援の実現を目指しました。その形として、被災地の学校と被災地外の学校を繋ぎ、支援する15校のうち、12ペアの学校間の絆を築くことができました。両校は定期的に連絡を取り合い、義援金や体操服を送るなど、被災地の学校のニーズに合った支援を細く長く実施しています。

上記の活動の他に、Web サイトや街頭募金を通じ支援を募る、被災地の現状を伝える講演会やプレゼンテーションの実施、プロジェクトの活動費を集める活動などを行いました。また、被災地でのボランティア活動やイベントの実施など計 11 回の現地入りを実施しました。

第 1 フェーズの歩みをもとに第 2 フェーズへ

第 1 フェーズの終盤に被災地の 15 校を訪問し、ニーズ調査を実施しました。震災から 1 年を経た現状、今後必要となってくる支援、当プロジェクトに対するご意見について伺いました。このニーズ調査の結果と 1 年を通じた活動の反省を踏まえ、第 2 フェーズ（2012 年 4 月 1 日～2013 年 3 月 31 日）のプロジェクト目標を「被災地の生徒・児童のニーズに応じた、顔の見えるお金の支援を継続的に行う」と決定しました。

被災地は少しずつ、着実に復興に向かって歩みを進めています。しかし、震災の爪痕は色濃く残り、完全な復興を成し遂げるにはまだ何年もの歳月を要することを忘れてはなりません。私たちは温かな応援をくださる方々とともに、第 2 フェーズを始動しました。

第 1 章 プロジェクトの歩み

第 1 節 活動スケジュール

1. 四半期毎の活動の見直し

第 2 フェーズは、第 1 フェーズ終了後 2012 年 4 月 1 日から 2013 年 4 月 1 日までとし、1 年を四半期に分けて活動を行った。

第 2 フェーズ：2012 年 4 月 1 日～2013 年 3 月 31 日

第 1 ターム：2012 年 4 月 1 日～6 月 15 日

第 2 ターム：2012 年 6 月 16 日～9 月 15 日

第 3 ターム：2012 年 9 月 16 日～12 月 15 日

第 4 ターム：2013 年 2 月 16 日～2013 年 3 月 31 日

上記のように 1 ターム 3 ヶ月として活動実施期間に区切りをつけ、活動の見直しを行った。活動の見直しの際にはそのターム初期に設定した目標はどれほど達成されたか、活動において浮上した問題は何かを確認し、それらを踏まえたうえで次タームの目標の設定や活動の計画を立てた。各タームの目標や活動詳細に関しては、同章第 2 節から第 5 節にかけて記載する。

2. 活動年表

各タームにおける活動の詳細な報告を行う前に、第 2 フェーズの活動を年表形式にまとめたものを以下に記載する。

日程	活動
2012 年	
3 月 17 日	第 2 フェーズ始動
5 月 12 日	兵庫県立星陵高等学校学園祭への参加
5 月 24 日～27 日	第 1 回現地入り ・伊里前小学校・名足小学校にて支援贈呈式（大阪平野ロータリークラブとの共同支援・活動） ・ニーズ調査
5 月 27 日	AICAT 総会への参加
8 月 2 日	インドネシアサティヤワチャナキリスト教大学の学長へ活動報告のプレゼンテーション実施
9 月 2 日	芦屋キワニスクラブより「キワニス子ども応援隊 特別賞」受賞
9 月 2 日～6 日	第 2 回現地入り ・ニーズ調査

	・多賀城小学校にて支援贈呈式
10月6日	神戸・元町にて街頭募金実施
10月10日	神戸キワニスクラブにてプロジェクト紹介、活動報告のプレゼンテーション実施
10月19日	芦屋ソロプチミストより「日本財団学生ボランティア・クラブ賞」受賞
10月21日	多文化関係学会への参加
11月6日	上ヶ原小学校にて活動報告のプレゼンテーション実施
11月7日～10日	第3回現地入り <ul style="list-style-type: none"> ・仙台キワニスクラブでのプレゼンテーション ・名足小学校にて支援贈呈式（大阪平野ロータリークラブとの共同支援活動） ・名足小学校の社会科見学へ同行（大阪平野ロータリークラブとの共同支援活動）
11月30日 ～12月2日	第4回現地入り <ul style="list-style-type: none"> ・多賀城小学校 PTA 主催ふれあい授業「TWF2012 あたりまえもちつき大会」へ参加
12月4日	吐山小学校義援金手渡し式に出席
12月5日	神戸キワニスクラブより社会公益賞受賞
12月16日～17日	第5回現地入り <ul style="list-style-type: none"> ・仙台キワニスクラブの皆さまと共同支援・共同活動についての話し合い
2013年	
2月18日～19日	あしなが育英会本部訪問

第2節 第1ターム

1. 第1フェーズの反省を生かした第2フェーズ第1タームの計画立案

ターム目標	第2フェーズの基盤を確立する
活動	1.内部運営組織を整備する 2.プロジェクトの理解者を増やす 3.ニーズに応じた対応可能な活動を検討する 4.募金者と支援者の写真を集める 5.Webでの情報提供を徹底する 6.Webサイトを多言語化する 7.提携元校へ情報提供を行う 8.活動経費を集める

2. 活動詳細

兵庫県立星陵高校文化祭

目的：プロジェクトの紹介、被災地のニーズ報告、募金活動

参加メンバー：浅野由香梨、玉井謙吾、京橋彬子、椎野佑梨、塩住里佳子、金有利

概要：2012年5月15日、兵庫県立星陵高校の文化祭「星陵祭」に参加させて頂いた。当日は、特設ブースにて被災地を訪れた際の写真を掲示し、当プロジェクトの活動内容の説明やムービー上映を行った。募金活動は星陵高校の皆さまに協力して頂き、ブースに足を運んでもらえるよう呼びかけながら学校内を巡回した。小さいお子様から高校生、ご年配の方まで幅広い年代の方々がブースにお越しくださり、募金をしてくださった。

第1回現地入り

目的：①支援を届ける、②提携先学校への第2フェーズ企画説明およびニーズ調査、
③西宮市立大社小学校の支援活動協力

参加メンバー：玉井謙吾、松下明日香、小國葉

概要：2012年5月24日から5月26日にわたり、大阪平野ロータリークラブの皆さまとともに宮城県南三陸町、気仙沼市、多賀城市を訪問した。

① 南三陸町立伊里前小学校、南三陸町立名足小学校へ支援を届ける

当プロジェクトが行ったニーズ調査の結果に基づき、大阪平野ロータリークラブの皆さまより各小学校へ義援金が贈られ、伊里前小学校・名足小学校合同運動会にて贈呈式を実施した。義援金は伊里前小学校でCDラジカセとワイヤレスマイク、名足小学校で一輪車とスタンドの購入に充てられる。

② 提携先学校への第2フェーズ企画説明およびニーズ調査

多賀城市立多賀城小学校、多賀城市立天真小学校、気仙沼市立小泉小学校、気仙

沼市立小泉中学校の 4 校を訪問させて頂いた。時間の都合上、小泉小学校と小泉中学校でのニーズ調査は実施できなかったが、学校の先生方のお話から、現地の人々は日常を取り戻しつつあることが伺えた。

③ 大社小学校の支援活動協力

昨年大社小学校から名足小学校の 1 年生に対して送られた体操服を児童が運動会で着ている様子を、大社小学校の校長先生のご要望により、写真に収めてお送りした。また大社小学校では夏祭りで伊里前福幸商店街の商品を販売するため、校長先生に依頼されて、それらの商品の視察を行った。

特定非営利活動法人国際協力アカデミーひろしま (AICAT) の総会へ参加

目的：プロジェクト 1 年目の活動報告

参加メンバー：國政歩美、椎野佑梨

概要：2012 年 5 月 27 日、当プロジェクト発足当初から協力団体としてお世話になっている AICAT の総会が広島で行われた。AICAT の皆さまには、募金入金窓口の口座をお借りしている他、活動資金の借り入れもさせて頂いており、当プロジェクトが活動運営基盤を作る段階から大変お世話になっている。総会では、プロジェクト 1 年目の活動報告と、日ごろの感謝の気持ちをお伝えした。また、プレゼンテーションを行った後、様々なアドバイスや質問を頂いた。

3. 代表挨拶

第 1 タームは、2 年目の活動指針の決定に試行錯誤しました。「被災地で何が求められているのか、何ができるのか」とこれまでの活動を振り返り、提携先校の先生方から頂いた言葉のひとつひとつや、ニーズと向き合う日々が続きました。被災地の現状はもちろんのこと、プロジェクト 1 年目の反省点から組織の強み、弱みを分析し、アイデア出しに知恵を絞りました。やはりニーズに合った顔の見える支援を続けていきたい、そして予めニーズを伺った上で義援金を募ることで支援の輪を広げたいという結論に至り、2 年目の活動が本格的に始動しました。提携先の先生方には、お忙しい中一度々ニーズ調査にご協力頂き、本当にありがとうございます。継続的にご支援して下さる方もおり、二度三度と提携元の学校や海外からもご支援が届くたびに、嬉しい気持ちになりました。また私たちの手を介さず、直接義援金のやり取りをされる学校もあり、プロジェクト発足当初に思い描いていた、継続的支援のための人的ネットワーク構築が少しずつ実を結んでいるようで感慨深いです。

被災地支援活動の経験が乏しく、適確な活動を模索していく困難もありました。しかし、何かしたい、しなければという気持ちひとつで集まった私たちにとって、周りの方々から貴重な学びの機会を頂いてきた 2 年間でもありました。本当にありがとうございます。

今春、私も含めメンバーの約半数が卒業を迎えることとなりました。復興の道半ば、まだ出来ることがある中でこの活動からは卒業となり、名残惜しく思います。後輩達は頼もしい姿で奮闘しております。お世話になっている皆さまには、厳しくも温かい目で後輩達を見守って頂けますよう、今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。

第1ターム代表 松下 明日香

第3節 第2ターム

1. 前タームの反省を活かした第2タームの計画立案

ターム目標	提携先の明確なニーズを獲得すると共に、提携元の更なる支援を呼び掛ける
活動	1.提携先の具体的なニーズを聞く 2.提携元の理解・協力を得る 3.Webサイトを充実させる 4.マスコミに取材してもらう 5.支援元へ再度支援を呼び掛ける 6.新メンバーを10人入れる 7.Webサイトの英語バージョンを作成する 8.お金を管理する 9.学会の準備をする 10.活動報告を通じた広報活動を行う

2. 活動詳細

サティヤ・ワチャナ・キリスト教大学副学長へのプレゼンテーション

目的：活動報告

参加メンバー：玉井謙吾、浅野由香梨、椎野佑梨

概要：2012年8月2日にインドネシアのサティヤ・ワチャナ・キリスト教大学から副学長のマルタ先生とアリー先生が関西学院大学をご訪問された。昨年度、プロジェクトを介して、サティヤ・ワチャナ・キリスト教大学からのご支援を女川町の教育委員会へお届けしたため、女川町の小中学校の現状や、義援金の使用用途に加え、当プロジェクトの活動報告をさせて頂いた。また、サティヤ・ワチャナ・キリスト教大学の皆さまが被災地の復興を願い作成して下さったステッカーを頂いたので、女川第一小学校へお届けした。プロジェクトの説明に終始耳を傾けてくださり、帰国後、在校生に対して支援の状況を伝えたいというお言葉を頂いた。

芦屋キワニスクラブでのプレゼンテーション

目的：助成金の獲得

参加メンバー：椎野佑梨、芳木啓太

概要：2012年9月2日、芦屋キワニスクラブ「キワニス子ども応援隊」の最終選考会に参加した。「子ども達の元気を支援するプロジェクト」を企画しプレゼンテーションを行った。惜しくも大賞は逃してしまったが、特別賞を受賞した。（詳細は第3章）

第2回現地入り

目的：①ニーズ調査、②支援を届ける

参加メンバー：玉井謙吾、脇本拓哉、小國栞、京橋彬子、椎野佑梨、奥澤智子、芳木啓太、齋藤未歩

概要：2012年9月2日から6日の間、宮城県女川町、南三陸町、気仙沼市、多賀城市を訪問し、提携先学校へのニーズ調査、今後の学校との関係の見直し、多賀城小学校への支援のお届けを目的とし活動を行った。

① ニーズ調査

提携先校全校を訪問させて頂き、学校の様子やニーズ、今後の学校運営方針などをお伺いした。地域により状況は異なるが、学校の教材などは足りているものの、狭い仮設住宅での生活によるストレスや家庭学習時間の減少、運動量の低下などが問題として挙げられた。また、保護者の負担削減のための経済的支援として、課外活動の際に必要なバス代などが挙げられた。加えて、震災直後に届いた大量の支援物資が教室や廊下に未だに置かれている様子も目の当たりにした。

② 多賀城小学校へ支援を届ける

広島市立美鈴が丘小学校からお預かりした義援金を多賀城小学校にお届けした。今後は自立して学校を運営していきたいという多賀城小学校の意思をお聞きし、今回で義援金の贈呈は最後となった。

3. 代表挨拶

震災発生から約1年半、震災に関する報道が徐々に減少し、社会からの関心が薄れていく中、提携先の明確なニーズを獲得し発信していくことで記憶の風化を防ぐとともに、被災地が本当に必要としている支援が届けられるのではないかと考え、第2タームは、「被災地の明確なニーズを獲得する」ということに重点を置き活動を進めました。

9月の現地入りは、学部1年生時から当プロジェクトに携わり、3年生になった私が代表を務めているという時の流れの速さを感じながらも、仮設住宅で生活する被災地の方々の暮らしを目のあたりにし、復興への道りはこれからも続いていくことを痛感しました。子ども達は震災以前のように自由に友だちと遊べる場を失い、また家庭学習が十分にできないなど、仮設住宅生活の問題は深刻です。また、通常業務を行いながら、支援の受け入れに奔走されている先生方の姿に、ニーズに即した支援の重要性を感じるとともに、震災前の生活を取り戻そうと尽力されている先生方から、私も勇気を頂きました。

第2タームでは、被災地のニーズを明確化することで第3タームの「ニーズを発信して支援を届ける」という目標へ繋げる事が出来たと思います。私たちを信頼して情報を開示してくださった先生方、いつも温かく迎えてくださる被災地の方々、私たちが発信する情報を頼りにしてくださる支援者の皆さまへ感謝の気持ちでいっぱいです。また、昨年と比

べて、提携先校との関わりも深くなったように感じ、嬉しく思います。まだまだ未熟ですが、今後も自分たちにできることを考え、活動をしていきたいです。

第2ターム代表 椎野 佑梨

第4節 第3ターム

1. 前タームの反省を活かした第3タームの計画立案

ターム目標	提携関係を整理し、ニーズに即した義援金を集めて届ける
活動	1.提携先・提携元校関係を整理する 2.提携先校の最新情報を管理する 3.ニーズ掲載方法を再考する 4.Webサイトの情報を整理する 5.義援金を集める 6.メディアに発信し続ける 7.ロータリークラブの支援を提携先校に届ける 8.学会を成功させる 9.新メンバーを2人入れる

2. 活動詳細

街頭募金活動

目的：風化を防ぐ、お金の価値を再確認する

参加メンバー：浅野由香梨、玉井謙吾、亀崎綾乃、齊藤未歩

概要：2012年10月6日、神戸三宮大丸前にて募金活動を実施した。この街頭募金の目的は、震災から1年半経過した現在でも被災地の復興には未だ支援が必要であることを多くの方々に知って頂くこと、また、当プロジェクトのメンバーが義援金集めの大変さを自ら感じることであった。「うちの子も関学に行っているから」、「わたしも東北支援のボランティアをやっています」と言って募金して下さる方、「東北のために」とお小遣いを募金に回して下さる中学生など、大勢の方々からご支援頂いた。今回の募金活動では当初目標していた金額を超えた21,000円を集めることができた。

神戸キワニスクラブへのプレゼンテーション

目的：プロジェクトの紹介

参加メンバー：京橋彬子、芳木啓太

概要：2012年10月10日、神戸キワニスクラブの例会にて、プロジェクト紹介をさせて頂いた。当プロジェクトの運営手法や活動内容、活動を続けてきた感想などを発表した。この例会への参加がその後の神戸キワニスクラブとの共同支援活動のきっかけとなった。

ソロプチミスト日本財団学生ボランティア・クラブ賞の受賞式への出席

目的：受賞式への出席

参加メンバー：小國葉

概要：国際ソロプチミスト芦屋様にご推薦頂き、「ソロプチミスト日本財団学生ボランティア賞」を受賞した。2012年10月19日、受賞式典に出席した。（詳細は第3章を参照）

多文化関係学会への登壇

目的：協力団体の関係者分析発表

参加メンバー：松下明日香、西躰文音、玉井謙吾、脇本拓哉、小國葉、芳木啓太

概要：2012年10月21日、多文化関係学会2012年度年次大会震災ワーキンググループセッションにて「Heart on Coin “絆”の人的ネットワーク～震災復興支援の関係者分析～」をテーマに発表した。セッションでは、協力団体とのネットワーク構築過程を見直し、分析した結果を報告したほか、協力団体の皆さまにもご登壇頂き、当プロジェクトメンバーと「学生による災害復興支援活動の可能性」についてディスカッションを行った。（詳細は第2章を参照）

西宮市立上ヶ原小学校でのプレゼンテーション

目的：活動紹介

参加メンバー：小島みなみ、芳木啓太

概要：2012年11月6日、上ヶ原小学校4年生の総合学習の時間を頂き、当プロジェクトのメンバーが実際に被災地に行って感じたことや見聞きしたことについて、写真を用いてプレゼンテーションを行った。多くの児童が熱心に耳を傾け、メモを取り、積極的に質問を投げかけてくれた。短い時間ではあったが、子どもたちが震災と真摯に向き合い、被災地について考えている様子を感じ取ることができた。

第3回現地入り

目的：①支援のお届け、②社会科見学への同行、③仙台キワニスクラブ様へのプロジェクト紹介

参加メンバー：亀崎綾乃、芳木啓太、齋藤未歩

概要：2012年11月7日から10日の間、大阪平野ロータリークラブの皆さまとともに名足小学校へ訪問し、支援をお届けした。また、名足小学校5年生の社会科見学に同行した。

① 支援のお届け

当プロジェクトが行ったニーズ調査の結果に基づき、大阪平野ロータリークラブより名足小学校へ義援金200,000円の支援のご協力をして頂いた。この現地入りでお届けした義援金は、私たちが同行した社会科見学を含む課外活動のためのバス代として使用さ

れる。

② 社会科見学への同行

名足小学校 5 年生の社会科見学へ同行し、トヨタ自動車の工場見学、阿部の蒲鉾店で蒲鉾手焼き体験、五大堂見学を行った。また、子どもたちや保護者の方とのコミュニケーションを図るとともに、児童の安全面のサポートを行った。

③ 仙台キワニスクラブへのプロジェクト紹介

神戸キワニスクラブのご紹介により、仙台キワニスクラブの定例会にてプロジェクトの活動内容を説明させて頂いた。

第 4 回現地入り

目的：多賀城小学校 PTA 主催ふれあい事業実施の補助

参加メンバー：脇本拓哉、小國栞、小島みなみ

概要：2012 年 12 月 1 日、多賀城小学校 PTA 主催ふれあい事業「TWF あたりまえもちつき大会」実施に際し、当プロジェクトメンバーがお手伝いに伺った。多賀城小学校では、毎年夏と冬に、PTA 主催のフェスティバルが行われる。2011 年 7 月に多賀城小学校へ義援金の受け渡しに行った際、当プロジェクトのメンバー 2 名が、PTA 主催の夏のふれあい事業に参加したことをきっかけに、同年冬のふれあい事業にも参加のお誘いを頂いた。今回のふれあい事業には約 200 名の子どもたちが参加し、DVD 鑑賞や工作、餅つきを行った。PTA の方から、「まだまだ復興に時間がかかる地域もあるが、思っていたより復興は早く進んでいると思う」、というお話を聞くことができた。

吐山市立吐山小学校訪問

目的：義援金手渡し式への出席

参加メンバー：脇本拓哉、齊藤未歩

概要：2012 年 12 月 4 日、奈良県吐山市に位置する吐山小学校が集めてくださった義援金を手渡し式にてお預かりするためにお伺いした。また、児童や保護者の皆さまに被災地の様子や当プロジェクトの活動を報告した。

神戸キワニスクラブ第 37 回社会公益賞贈呈式・年末忘年家族会への出席

目的：贈呈式の出席

参加メンバー：京橋彬子、芳木啓太

概要：2012 年 12 月 5 日、神戸キワニスクラブ社会公益賞の受賞に伴い、神戸オークラホテルにて開催された授賞式および忘年会に出席した。（詳細は第 3 章を参照）

仙台キワニスクラブ訪問

目的：共同活動の模索

参加メンバー：小島みなみ、芳木啓太

概要：2012年12月16日～18日、仙台キワニスクラブへニーズ調査のご報告および今後の共同支援、共同活動についての話し合いを行うため、仙台キワニスクラブの皆さまを訪ねた。仙台キワニスクラブの皆さまには第3回現地入りで当プロジェクトの紹介をさせて頂いて以来、提携先校のニーズに即した義援金支援のご協力を頂いている。また、話し合い後、仙台国際ホテルで開催された年忘れパーティーにご招待頂き、多くの方々へプロジェクトの紹介を行う機会を頂いた。

3.代表挨拶

第3ターム・第4ターム期の代表は小國葉が兼任した。小國の代表挨拶は第4ターム(同章第5節)に記載する。

第5節 第4ターム

1. 前タームの反省を活かした第4タームの計画立案

ターム目標	これまでの活動で明らかになったニーズに対し、適切な支援方法を検討し決定する
活動	1.第2フェーズ報告書を作成する 2.絆本原稿を作成する 3.奨学金支援制度について研究し検討する 4.被災地のニーズを明らかにする 5.提携関係整理の必要性を検討する 6.2012年度の会計決算を行う 7.新メンバーのリクルート準備を行う

2. 活動詳細

第4タームは「これまでの活動で明らかになったニーズに対し、最適な支援方法を検討し、決定する」というチーム目標を掲げ、第2フェーズの反省をもとに、次フェーズからの方向性を定めることを主な活動としている。次フェーズは震災から3年目となり、世間の被災地支援に対する関心が徐々に低下し、被災地においては支援を必要としている人々が限定的になる中で、これまでの当プロジェクトの活動を継続する意義を根本から問い直し、次フェーズの骨子となる幾つかの活動案を検討している。

3. 代表挨拶

第3タームは第1ターム、第2タームで温めてきた計画を実行するほか、新たな支援の輪が広がるなど、プロジェクトの活動として非常に実りのある期間でした。プロジェクト第2フェーズ開始時に「震災の記憶の風化」や「被災地離れ」を懸念していましたが、多くの支援を被災地に届けることができました。今もなお、こうして私たちを応援してくださる方々、被災地支援についてともに考え、行動してくださる方々に感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございます。

また、このタームでは活発な被災地訪問や支援のお届け、協力者の皆さまへの活動報告など対外への動きもさることながら、自分たち学生が震災復興を行う意義や私たちを信頼し応援してくださる方々との繋がり、今後の活動など、プロジェクトそのものについて考え、向き合う機会も多くありました。活動や繋がりがここへ来てさらに大きく展開し、今私たちは「これから何ができるのか、何をすべきなのか」を考える岐路に立っています。私たちは2年の活動を通して、支援者側、被災地側が持つ苦悩を垣間見てきました。支援

を届けたくとも「何処の誰がどのように困っているのか」が分からないという支援者のジレンマ、一刻も早く自立しなければならないが支援に頼らざるを得ない、また本当に支援を必要としている人へ適切な支援が届かないという被災地のジレンマなど、時を経るごとに浮き彫りになっていく課題がたくさんあります。しかし当プロジェクトは「震災から時間が経ったとき、被災地は何に困るのか」ということを考え発足しました。また、私たちには 2 年間を通して築きあげてきた多くの方々との「絆」があります。当プロジェクトを含む多くの東日本復興支援団体の変化を迫られていますが、これからも私たちができることに力を尽くしたく思っております。

この文章を執筆している今、私は第 3 タームに引き続き第 4 タームの代表も務めさせて頂いております。現在当プロジェクト第 3 フェーズの方向性について検討しておりますが答えは出ておりません。しかし多くの方々に支えられてきたこのプロジェクトを通し、少しでも復興の支えになれば、皆様と同じ道を歩めたら、という気持ちはメンバー一同に共通しております。今まで築きあげたご縁を大切にしながら、自分たちにできることを模索して参ります。

日頃よりお力添え頂いている皆さまには、引き続き温かく見守って頂ければ幸いです。今後も皆さまには何かとご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

第 3 ターム・第 4 ターム代表 小國 栞

第2章 多文化関係学会への参加

第1節 概要

多文化関係学会第11回年次大会における、震災ワーキンググループセッションへの参加は、大会委員長を務めておられる関西学院大学経済学部中川慎二先生のお声かけによって実現した。中川先生は、当プロジェクト発足当初より、ドイツにおける支援の窓口を務めてくださっている。今回、私たちは「Heart on Coin “絆”プロジェクトの人的ネットワーク～震災復興支援の関係者分析～」をテーマに、被災地支援という目的のもとに形成された「協力団体間のネットワーク」に着眼した。セッションでは、様々な社会的組織との連携を振り返るために「関係者分析」を行った。続くラウンドテーブルでは、協力団体の登壇者とともに、関係者分析の結果を踏まえて今後の関係の発展性や支援の在り方についてインタラクティブで有意義な議論が交わされた。以下に震災ワーキンググループセッションの概要を記載する。

日時：10月21日 13:15 - 15:15

会場：関西学院大学上ヶ原キャンパス 第4別館

セッション内スケジュール：

- ①13:15-13:30 プロジェクト活動概要プレゼンテーション（学生）
- ②13:30-13:45 各組織活動紹介（登壇者各人）
- ③13:45-14:00 問題分析（登壇者、学生）
- ④14:00-14:50 ラウンドテーブル（登壇者、学生）
- ⑤14:50-15:10 フロアからの質問（参加者）
- ⑥15:10-15:15 総括

総合司会：兵庫県立大学経済学部 野津隆志先生

ファシリテーター：関西学院大学国際教育・協力センター 關谷武司先生

登壇者：特定非営利活動法人国際協力アカデミーひろしま（AICAT）中浜慶和様

大阪平野ロータリークラブ 喜多敏明様

デュッセルドルフ大学現代日本研究所 前みち子先生

西宮市教育委員会学校教育課 佐々木理先生

関西学院大学総合政策学部4年 松下明日香

関西学院大学総合政策学部4年 脇本拓哉

第2節 セッション内容

1. 関係者分析

震災復興支援における各団体の強み・弱みについて分析を行った。分析結果について当プロジェクトの学生が説明を行い、補足が必要な点につき、登壇者の皆さまにコメントを頂いた。以下に発表に用いた分析ボードを可視化した表と発言要旨を記載する。

【特定非営利活動法人国際協力アカデミーひろしま】

AICATの強み	国際的な人的ネットワークを持つ	Heart on Coin “絆”プロジェクトの弱み	活動費の捻出が困難である
	支援活動の運用実績がある		支援の運用実績がない
	Webサイトを持つ		学生団体であるが故に社会からの信頼が得にくい
	NPO法人格を持っている		
AICATの弱み	若い人材が少ない	Heart on Coin “絆”プロジェクトの強み	被災地に足を運べる人材がいる
	役員・スタッフの方々が忙しく支援に手が回らない		時間に融通の利く学生が活動の主体である
			人件費のかからない労働力（学生）を持つ
			AICAT代表理事が協力して下さる

中浜様：AICATは、海外での災害発生時の支援コーディネートを行うなど、主に海外に向けた活動を展開してきた。今回の震災では、国内において初めてコーディネーションを実践する機会となったが、同じ志を持った学生とともに活動を進めることができ、非常に心強かった。

【西宮市教育委員会】

西宮市教育委員会の強み	日本の学校教育システムについて熟知している	Heart on Coin “絆”プロジェクトの弱み	学校という閉鎖的な組織に介入する術を持たない
	社会からの信用がある		学生団体であるが故に、社会からの信用が得にくい
	教育者としての知見がある		状況判断能力に欠ける
	被災地訪問する機会を持つ		
	阪神淡路大震災での被災経験を持つ		活動費の捻出が困難である
西宮市教育委員会の弱み	職員の方は定常業務に多忙であり、支援活動に注力出来ない	Heart on Coin “絆”プロジェクトの強み	時間に融通の利く学生が活動の主体である
			学生としてのパワーと活気がある
			継続性がある

佐々木先生：関西広域連合の方針により、西宮市は宮城県南三陸町への支援をピンポイントに行っていた。無骨な若者たちの一生懸命な取り組みへの協力は、教育委員会の本来の目的である教育活動に根付くものであった。

【大阪平野ロータリークラブ】

大阪平野ロータリー クラブの強み	新世代奉仕委員会を持つ	Heart on Coin “絆” プロジェクトの弱み	外部対応に慣れていない
	会員が多く人的ネットワークが広 活動資金が潤沢である		活動費の捻出が困難である
大阪平野ロータリー クラブの弱み	会員の方々が多忙であり、支援 活動に注力することが難しい	Heart on Coin “絆” プロジェクトの強み	時間に融通の利く学生が活動の主体で ある
			被災地の学校とのネットワークがある 被災地で現地調査を行い、学校のニーズを把握している

喜多様：活動をともにする中で、非常に元気をもたらした。次の共同プロジェクトも準備段階にあるので、頑張ろう。

【デュッセルドルフ大学現代日本研究所】

デュッセルドルフ大 学 義援金支援窓口の 強み	デュッセルドルフは日本人の多 い地域である	Heart on Coin “絆” プロジェクトの弱み	海外に向けての情報公開が不十分である
	ドイツ・日本を行き来し、活動 をサポートして下さる先生がい らっしゃる		
デュッセルドルフ大 学 義援金支援 窓口の 弱み	日本から遠い	Heart on Coin “絆” プロジェクトの強み	被災地の学校とのネットワークがあ る
	被災地の情報が得にくい ドイツ赤十字社が信頼に値しない		義援金の届け先を示すことができる 被災地で現地調査を行い、学校のニーズを把握している ドイツ・日本を行き来し、活動をサ ポートして下さる先生がいらっしゃる

前先生：デュッセルドルフは多くの日本企業が拠点を置き、日本人コミュニティーが広く形成されている地域である。また、現代日本研究所はその特質から日本への関心や共感性が非常に高い。研究所内で被災地支援の方法について検討していたところ、当時サバティカルでドイツに滞在中の中川先生の紹介により当プロジェクトを知った。プロジェクトの活動内容や、学生が運営する団体であることに興味を持った。

2. ラウンドテーブル

問題分析結果に基づき、主に①当プロジェクトと各協力団体が連携した要因、②当プロジェクトへの協力と教育的支援、③学生団体と支援活動を連携する際の条件、の3点について議論がなされた。關谷先生のファシリテートのもと、学生による災害復興支援の可能性について、学生を交えて意見交換が行われた。

①当プロジェクトと各団体が連携した要因

中浜様：プロジェクトに携わる学生とは震災以前から良好な関係を持っていた。同じ方向性（志）を持つことを互いに理解していたため、震災発生直後、すぐに行動に移すことができた。広島に拠点を置いていると、「何かしたい」、という思いはあっても、手と足が

足りない状況であった。AICATには大学教授をはじめとして、教育に従事する者が多く在籍しており、学生への教育的観点からも、絆プロジェクトに協力することはごく当たり前のことであった。

松下：義援金やプロジェクト運営のための資金を集めるにあたり、信頼性の構築が必要であった。その信頼性を得るためにAICATの口座や活動資金をお借りし、活動を基盤から支えて頂いた。

佐々木先生：2011年4月9日に市からの指令を受けて被災地を訪問した。そこでは若者の力の必要性を痛感した。定常業務を抱える教育委員会の職員や退職した職員を派遣することは難しく、人手不足であった。「自分を無条件で受け入れてくれる若いお兄さん、お姉さん」の力が子どもたちには必要である、という被災地の関係者の話と、当プロジェクトの持つ若者の集約力が合致し、提携することに決めた。

松下：一学生が被災地の学校と関係を構築しようとしても、なかなか相手にしてもらえない。西宮市教育委員会と組み、経験豊富な先生方の指導を受けることができたことは、支援先の開拓および支援方法を検討する上で、非常に重要であった。

喜多様：ロータリークラブは、クラブ、社会、国際、労働、の4つの奉仕の方針で社会貢献活動を続けてきた。2010年から新世代奉仕という活動が加わり、青少年支援に力を入れているというタイミングで学生たちと出会った。高齢化が目立つクラブのメンバーが現地に赴くことは時間的、体力的にも難しいのだが、次世代の青年たちの活動を支えることで、両団体と被災地により良い形で支援できるのではと考えた。

松下：義援金は集まっても活動を進めるための費用を捻出することが非常に難しい時期に、大阪平野ロータリークラブ様から活動資金を援助して頂いたことで活動を続けていくことができた。

②当プロジェクトとの協力関係と教育的支援

關谷先生：教育委員会のネットワーク、ロータリークラブのネットワークでも支援活動をされていたが、なぜ当プロジェクトとも協力関係を結び活動を行ったのか。

喜多様：ロータリークラブのメンバーが被災地の小中学校に関わっていくよりも、学生の方が歳も近く、自然体で子どもたちと関わっていけることが良い。

中浜様：学生団体であることについて不安要素を挙げるとすれば、福島原発事故によってプロジェクトの活動に制約がかかるのではと考えたことがあった。しかし、それは杞憂であり、学生たちは何度も被災地に足を運んでいる。

佐々木先生：学生たちのプレゼンテーションは思いが先行するあまり、クールな発表とは言えなかったが、そこに惹かれた。自分たちが学生だったときを振り返ると、こんな思いを持って活動はしたことがなかった。「今の若者たちは」という言葉は正反対の意味で用

いられるべきだと感じた衝撃的な出会いだった。

關谷先生：当プロジェクトとの補完関係が成立したことに加えて、教育の対象であり不完全な学生であるからこそ、活動を応援（援助）したくなったということか。また、学生ボランティア団体は学内にも多々存在したが、プロジェクトをマネージする、ツールに従ってロジカルに整理し活動を進めるなど計画性を持った運営手法を取ることも連携が進められた要因となるのではないか。では、ドイツの学生による支援活動はどうであったのか。

前先生：大学と社会は隔絶されていることもあるが、絆プロジェクトと協力団体との関わりはこのことを否定する良い例となった。デュッセルドルフ大学においては、学生が写真展、冊子の制作を行い被災地への義援金やメッセージを募った。学生たちの底力には非常に驚いた。教育者には、学生たちの秘めた力を引き出すこと、後押しする姿勢を持つべきだ。デュッセルドルフ大学や関学の学生たちが行っている活動では、大学が最も苦手とする“実践的な教育”を援助出来る。

③学生団体と支援活動を連携する際の条件

關谷先生：今後新たに災害が発生し、「第2の絆プロジェクト」と連携することがある場合に、何が不可欠だと考えるか。

佐々木先生：垣根を取り払うこと。所属する学校教育課が大学を管轄しない部署でありながら絆プロジェクトと繋がったように、学生側ではなく、サポートする側がフィルターを下げ繋げなければ、支援の即時性や継続性は生まれてこないだろう。

喜多様：ともに活動を進める中で、双方が組織を研鑽し、補い合うことが必要。

脇本：長期で活動を続けることのできた背景にはサポートしてくださる社会的団体の方々と築くことの出来た関係性によって持つようになった責任感とプレッシャーが非常に大きかった。

④パネリストから学生への意見・質問

前先生：今現在活動が続けている学生たちもいずれ卒業していくが、どのように次世代の学生に活動を継承していくのか。

脇本：プロジェクトを立ち上げる手法、ミーティングで終わるのではなく、何かを生むことができるフレームワークの手法をまず学ぶことが重要。

中浜様：活動に参加したきっかけは何だったのか？また、なぜ今日まで活動を続けているのか？

学生1：被災地宮城県出身。継続的な震災支援をやりたいと思っていたところ、今まで知っていた支援団体とは異なる方法で支援をやっていた当プロジェクトを知り興味を持ったのがきっかけ。

学生2：国連学生ボランティアの面接で關谷先生から紹介して頂いたことがきっかけ。そ

ここで活動していた先輩方をみて、「こんな風になりたい」と思った。

3. 総括

本セッションでは、協力関係にある団体の分析結果に基づき、学生がハブとなり災害支援を行うという新たな可能性について検討した。

関係者分析では、協力団体と連携が成立する背景に、震災復興支援における双方の強みと弱みが相互に補完し合う関係になること、また継時的に変化が見られる当プロジェクトの強みと弱みが、協力者と結びつくタイミングに関連していることが明らかになった。

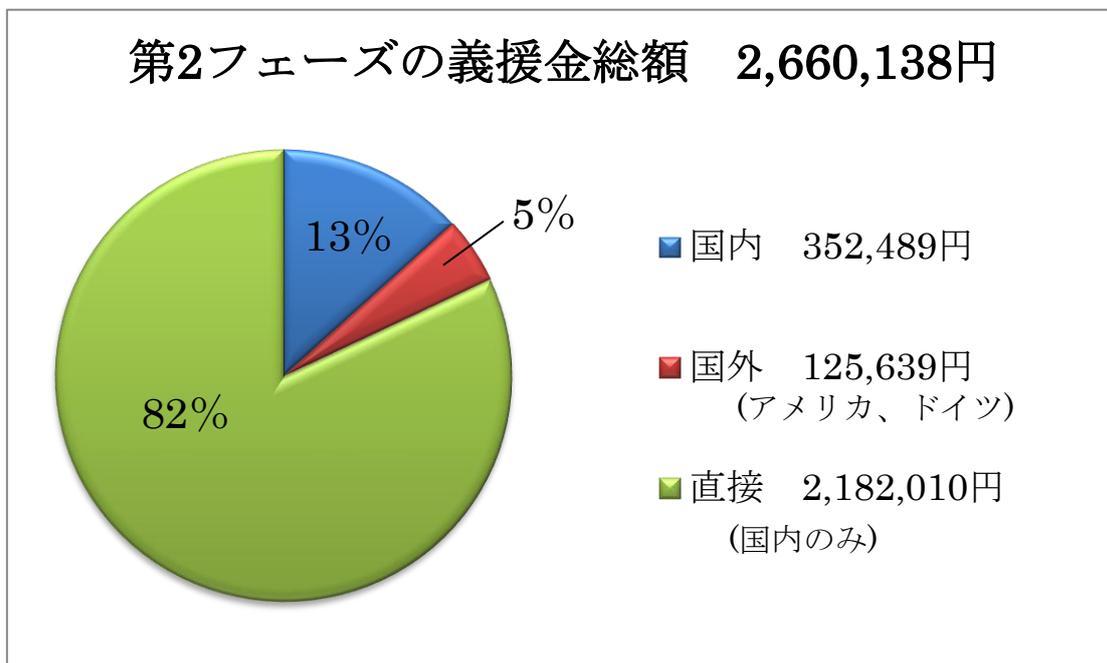
当プロジェクトが社会的組織との連携関係を構築し、継続的な支援を進めてきたことは、瞬発力・行動力のある学生が得意としてきた泥かきやがれき撤去のような従来の災害支援方法とは一線を画するものであった。ラウンドテーブルでは、学生による災害支援の可能性について議論がなされた。若者を育成しようという教育的観点を持つ団体との出会いは、学生団体が活動を進めていくうえで非常に重要であると考察される。

また、学生が様々な社会的組織とともに活動を進めていくことは、大学での学びを机上に留まらせるのではなく、社会という実践の場で活用することによって尊い学びが得られる点で、大きな社会的意義を持つことが示唆された。

関西学院大学を拠点とする当プロジェクトが社会の中でハブ機能を果たし、震災復興支援活動を進めてきたように、ドイツのデュッセルドルフでも学生が地域を巻き込み支援活動を実施している。今後再び災害が発生した場合に、当プロジェクトを先例とし、このようなネットワークが国内外に構築されていくことで、単発の支援ではない、学生による災害支援の新たなモダリティが形成されていくのではないだろうか。

第3章 義援金報告

第1節 義援金総額



第1フェーズでは4,248,678円の義援金を被災地にお届けした。震災発生から間もなく、世界中が東北を見守っていたこともあり、WEBサイトを通じて当プロジェクトの存在を知った方々からの支援の割合が最も多かった。特にWEBサイトを通じた支援の呼びかけは海外からの支援を募る上で非常に大きな役割を果たした。

第2フェーズでは2,660,138円の義援金をお届けした。国内の支援者の方々より352,489円、海外の支援者の方々より125,639円、合わせて478,128円の義援金を当プロジェクトがお預かりし、被災地の小中学校へお届けした。第2フェーズに義援金支援にご協力してくださった団体のほとんどが、第1フェーズに当プロジェクトを通して被災地への義援金支援にご協力頂いた団体であった。中には「今後も継続的に支援を行っていきたい」と考えていらっしゃる支援者も存在した。

上表に記載している「直接」とは、当プロジェクトに義援金を預けはしなかったものの、当プロジェクトが実施したニーズ調査の結果をもとに、支援者が「直接」被災地の小中学校に義援金をお届けした、第1フェーズ時と少々異なる支援の届け方のことである。大阪平野ロータリークラブ、仙台キワニスクラブに当プロジェクトが把握している被災地の状況やニーズをお伝えし、義援金支援にご協力頂いた。(詳細は同章第2節を参照)

第2フェーズでは第1フェーズに比べ、お届けした義援金の総額は減少したが、継続的な支援を意識して当プロジェクトに協力してくださった支援者や被災地と直接繋がろうという気持ちの強い支援者の方々が多かった。第2フェーズではプロジェクト発足当初からの悲願であった「自発的かつ継続的な支援が被災地に届く」「被災地の方々と被災地を応援

する方々をお繋げし、強い絆を構築して頂く」といった面で、大きく前進したのではないだろうか」と当プロジェクトは考えている。

第2節 義援金届け先一覧

1. 当プロジェクトがお預かりした義援金の届け先一覧

以下に、当プロジェクトがお預かりした義援金の届け先と支援者を記載する。なおこれらは義援金をお届けした時系列順となっている。

支援先	義援金額	支援元（敬称略）	特記事項
気仙沼市立 小泉小学校	83,374 円	<日本> 神戸市立垂水東中学校 <ドイツ> Arbeitskreis "Fliegende Kraniche" Meerbusch の会 <アメリカ> Japanese and American Student Union of D.C	2012年7月9日送金
南三陸町立 志津川中学校	192,752 円	関西学院千里国際高等部	2012年7月9日送金
女川町立 女川第二中学校	27,265 円	兵庫県立星陵高等学校	2012年7月12日送金
多賀城市立 多賀城小学校	58,225 円	広島市立美鈴が丘小学校	2012年9月5日贈呈式
つばくろ会	45,512 円	<アメリカ> Yukiko Schrock (Whitney Young Magnet High School)	2012年10月16日送金 つばくろ会とは、女川町内の特別支援学級の活動を支える団体である。
気仙沼市立 小泉中学校	41,000 円	<ドイツ>Fritjof Eckhardt <日本>神戸・元町駅での募金協力者	2012年11月5日送金

2. 支援協力団体と被災地へ届いた義援金の届け先一覧

当プロジェクトが実施したニーズ調査の情報をもとに、支援を行って頂いた協力団体と義援金の届け先を以下に記載する。

大阪平野ロータリークラブ

支援先	義援金額	義援金使用用途	特記事項
南三陸町立 伊里前小学校	180,000 円	CD ラジカセ ワイヤレスマイク	2012 年 5 月 27 日 贈呈式
南三陸町立 名足小学校	180,000 円	一輪車 一輪車スタンド	
名足小学校	200,000 円	社会科見学費用 (バス代)	2012 年 11 月 9 日 贈呈式

仙台キワニスクラブ

支援先	義援金額	義援金使用用途	特記事項
伊里前小学校	125,000 円	社会科見学費・ 社会科見学のバス代	2012 年 12 月 11 日 送金
小泉小学校	276,000 円	社会科見学費・ 課外活動費 (遠足費・バス代)	2013 年 2 月 4 日送金
小泉中学校	1,221,010 円	保護者負担軽減のための補助支援 3 年分 (学級費・部活動費・PTA 体育文化振興費・副教材費)	2013 年 2 月 4 日送金

第3節 学校への継続的支援

1. 支援先校、提携先校・提携元校一覧

以下の表は第1フェーズに絆をお繋げした提携校の一覧である。支援先校・提携先校とは被災地に位置する学校を指し、提携元校とは被災地を応援する学校を指す。学校同士で支援のやり取りや交流を持ったことがある学校を「提携先校・提携元校」と定義した。表中で下線が引かれている学校は第2フェーズでも支援をお届けした学校、ないし支援のご協力を頂いた学校、学校間の交流が継続されている学校である。

支援先/提携先学校	提携元学校
宮城県女川町立女川第一小学校(※1) 女川第二小学校 女川第四小学校	奈良県奈良市立吐山小学校(※2) St. John's Wood Pre-Preparatory School (イギリス)
宮城県女川町立女川第一中学校 女川第二中学校	
宮城県気仙沼市立小泉小学校	
宮城県気仙沼市立小泉中学校	北海道深川市立多度志中学校
宮城県多賀城市立多賀城小学校	広島県広島市立美鈴が丘小学校
宮城県多賀城市立多賀城八幡小学校	
宮城県多賀城市立多賀城中学校	
宮城県多賀城市立天真小学校	兵庫県西宮市立鳴尾小学校
宮城県南三陸町立伊里前小学校 名足小学校	兵庫県西宮市立大社小学校
宮城県南三陸町立歌津中学校	兵庫県西宮市立上ヶ原中学校
宮城県南三陸町立志津川中学校	関西学院千里国際中・高等部

※1 平成25年度より3校は合併し、現在は「宮城県女川町立女川小学校」として学校運営を行っている。

※2 第2フェーズでお預かりした支援を、第3フェーズ開始後に女川小学校へお届けした。

2.学校間継続的支援・交流

ここでは第 1 フェーズに絆をお繋げした提携校同士が、どのような交流を持ち、また継続的支援が行われているかを一部紹介する。

北海道深川市立多度志中学校と気仙沼市立小泉中学校

多度志中学校では 9 月に行われた学校祭において、募金活動を行い、集まった義援金 18,000 円を小泉中学校へ 10 月末に届けた。また学校祭において、メッセージカレンダーを作成し、小泉中学校との交流を図った。

ただ、小泉中学校の震災前の教育環境にいち早く戻りたいという考えから、今後の多度志中学校との交流は控えるという結果になった。震災後には多くの外部団体から応援メッセージが届けられたが、それに対応（お礼の手紙を生徒に書いてもらう等）するためには、多大なる時間が必要となり、この時間が震災前の環境に戻る大きな足かせとなっていた。プロジェクトとしても残念ではあったが、今後、多度志中学校には小泉中学校の復興をお見守り頂くこととなった。

図 1



(図 1) 多度志中学校から小泉中学校に送られたメッセージカレンダー

西宮市立大社小学校と南三陸町立伊里前小学校、南三陸町立名足小学校

大社小学校で行われた夏祭りにて、南三陸町の絆ロールを販売し、その収益を全額義援金に充てた。また PTA 会が中心となって校内で募金活動を行った。

これらの活動で集まった約 40 万円の義援金で体操服を購入し、伊里前小学校と名足小学校の新一年生に贈った。この体操服は南三陸町歌津地区伊里前商店街にあるマルエーという学校衣料取扱店に発注をしており、両校の支援と同時に地元経済の復興にも目を向けた支援を目指している。

新入生に対する体操服支援は 2012 年春、2013 年春の 2 度行われており、大社小学校は今後も新入生に対する体操服支援を継続して行いたいとのことである。

図 2



図 3



(図 2) 大社小学校が支援した体操服を着てかけっこをする名足小学校の一年生

(図 3) 名足小学校から大社小学校に送られたお礼状

図 4



図 5



(図 4) 名足小学校から大社小学校へ送られたお礼状

(図 5) 大社小学校から名足小学校へ届けられたお手紙

3.支援者一覧

【義援金支援者】

神戸市立垂水東中学校、中央共同募金、兵庫県立星陵高等学校、HORIE HIROYUKI、Japanese American Student Union of DC、Arbeitskreis “Fliegende Kraniche” Meerbusch の会、関西学院千里国際高等部、Yukiko Schrock、Fritjof Eckhardt、広島市立美鈴が丘小学校、神戸元町での募金協力者、大阪平野ロータリークラブ、奈良市立吐山小学校、仙台キワニスクラブ

※順不同、敬称略

【活動費支援者】

大阪平野ロータリークラブ、塚田康策様（大阪平野ロータリークラブ）、関西学院大学宗教活動委員会

※順不同、敬称略

第4節 受賞経歴一覧

当プロジェクトは以下の3団体より賞を頂いた。

国際ソロプチミスト芦屋

2012年10月19日 日本財団学生ボランティア・クラブ賞受賞

国際ソロプチミスト芦屋の皆さまには当プロジェクト1年目から義援金や活動費のご協力を頂いている。「ソロプチミスト日本財団学生ボランティア賞」への応募の際にも推薦して頂いた。

芦屋キワニスクラブ

2012年9月2日 キワニス子ども応援隊 特別賞受賞

芦屋キワニスクラブ主催「キワニス子ども応援隊」は子ども達の元気を支援するプロジェクトを対象に審査され、当プロジェクトは被災地の子ども達を元気づける催しを提案した。惜しくも大賞は逃したが、特別賞を頂き、活動費を支援して頂くこととなった。現在芦屋キワニスクラブ様にご支援頂いた活動費で実施する催しの企画をしている。

神戸キワニスクラブ

2012年12月5日 社会公益賞受賞

社会公益賞とは社会奉仕活動に携わる個人や団体に与えられる賞である。10月の例会にて当プロジェクトの紹介や活動報告の場を設けてくださった際に、神戸キワニスクラブの皆さまに当プロジェクトを高く評価して頂き、社会公益賞を頂いた。

おわりに

関係者一覧

【実施パートナー】

特定非営利活動法人国際協力アカデミーひろしま（AICAT）

【協力組織・団体・企業】

芦屋キワニスクラブ

大阪平野ロータリークラブ

株式会社アーテック

関西学院大学国際教育・協力センター

関西学院大学災害復興制度研究所

関西学院大学宗教活動委員会

神戸キワニスクラブ

国際ソロプチミスト芦屋

仙台キワニスクラブ

中央共同募金会

兵庫県西宮市教育委員会

※順不同 敬称略

プロジェクトメンバー一覧

芦田明美、浅野由香梨、國政歩美、松下明日香、室岡孝奈、中村静香、西躰文音、玉井謙吾、脇本拓哉、小國栞、亀崎綾乃、京橋彬子、椎野佑梨、塩住里佳子、金有利、小島みなみ、奥澤智子、芳木啓太、齋藤未歩 ※学年、五十音順

関係者コメント

困っている人の前を見て見ぬ振りして通り過ぎる輩。もういつのころからだろうか、そういう日本人が増えたと思う。そういう者に限ってそこそこ能力もあり、学校の成績などは良好だったりする。自分にとっての損得勘定に敏感なのだ。ただし、ほんの目先だけの損得勘定に。(誰が彼らをそんな風にした！)

東日本大震災が発生した頃、ちょうど学生たちは就職活動の真っ最中であった。ボランティアに駆けつける学生を尻目に面接会場へ足を運ぶ学生たちの胸中はどうだったのだろう。面接を延期することも無くその学生たちの採用に動く会社は自分の会社の未来をどういう人材に託したかったのだろう。(託すつもりなど無く、使い捨てにすることしか考えてなかった！?)

私は学生を義理人情のある人に育てたい。

この絆プロジェクトに関わってきた学生たちは、周りでバイトやサークル活動に自分の学生生活を謳歌している者たちに流されることも無く、来る日も来る日もプロジェクトの活動を続けている。貴重な4年間のうちの1年あるいは2年という彼らにとっては長い長いとても長い貴重な時間を、自らの信念のために費やし続けている。

「ありがとう」「偉いなあ」という言葉に励まされることもあるが、彼らを突き動かし続けているのは、「やらなければいけない」という使命感である。

私は、こんな彼らを見ていて、本当に愛おしく誇らしい。そして、とって嬉しなのは、ロータリークラブやソロプチミスト、キワニスクラブなどの立派な社会人の団体、学校の先生方やOBの皆さんが、彼らの誠実さを評価し応援を続けてくださっていることだ。

彼らのような若者がいる限り、日本の未来も捨てたもんじゃない。

そんな若者を育ててやろうとする大人がいる限り、その希望は小さくない。

学生の指導にお力を割いてくださっている皆さま、本当にありがとうございます。どうぞ今後とも厳しくも暖かいご支援をいただけますようよろしくお願いいたします。

特定非営利活動法人国際協力アカデミー
代表理事 關谷武司

謝辞

3.11 といえば世界各地であの悲劇を思い起こすほど、東日本大震災が世界に与えたイメージと衝撃は凄まじいものでした。震災発生当初、私は日本から遠く離れたアフリカ地域の一国、マラウイから日本へ帰国する飛行機の中にいました。震災の影響で、経由地点の香港で足止めされ、空港に設置されたテレビの前には人だかりができていました。CNNで流れるのは津波の映像、そこは母国、日本でした。わかっている情報は、日本・東北・津波発生・マグニチュード 8 ということだけ。早く日本に帰って、真相を確かめたい、被災者のために何かしたいという強い想いを抱きました。帰国後すぐに同志に呼びかけ、2011年3月16日に Heart on Coin “絆” プロジェクトを立ち上げました。私たち学生の力で何ができるかはわからない、しかし少しでも何かしたいという一心での行動でした。

プロジェクトを卒業し、社会人になり早二ヶ月が経過しました。プロジェクトの活動から一線を退いた今も、この経験は様々なところで活かしています。その一つが「自分に何ができるのか、何をすべきか」を考えることです。東日本大震災は、人力の及ばない自然の力により、人の命は簡単に奪われることを示しました。大勢の人が命の尊さ、いかに自らの人生を生きるべきかを立ち止り考えました。私もその一人です。この活動を通じ、自身の力は微力で、周りの助けなしには何もできないこと。しかし、懸命に努力し続ければ、状況は好転することを実感しました。当プロジェクトの活動と並行して取り組んだ就職活動でも、問いかけを続けました。「自身の人生をかけ、社会のために何をすべきなのか」という長期的な目標についてです。ぼんやりとした形ながらも答えを見つけ、社会人としての一步を踏みだしました。今はその目標達成のために、日々邁進しております。

日頃からご理解、ご協力頂く関係者の皆様に支えられながら、当プロジェクトもついに3年目を迎えることができました。被災地は復興が進み、ニーズは確実に減少しています。復興が進むにつれ、学生ができる支援は限られたものとなってきました。しかし、私たちができることを考え、また今後も皆様のニーズに応えられるよう、より一層努力してまいります。未熟な私たちではありますが、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

Heart on Coin “絆” プロジェクト 発起人

中村静香

参考資料

大社小学校から伊里前小学校、名足小学校への体操服の支援



サティヤ・ワチャナ・キリスト教大学への活動報告



大社小学校の夏祭りでの絆ロールの販売の様子



美鈴が丘小学校から多賀城小学校への支援お届けの様子



神戸大丸三宮店前での街頭募金の様子



国際ソロプチミスト芦屋様より日本財団学生ボランティア・クラブ賞の受賞



多文化関係学会震災ワーキンググループセッションへの参加



仙台キワニスクラブ様の例会でプレゼンテーションを実施



名足小学校 5 年生の社会科見学への同行



上ヶ原小学校でのプレゼンテーションの様子



多賀城小学校での多賀城ウィンターフェスティバルへの参加



吐山小学校義援金手渡し式への参加

